京都大学	博士(文学)	氏名	相　澤　伸　依
論文題目	ミシェル・フーコーの方法論の研究		

（論文内容の要旨）

本論文の目的は、ミシェル・フーコー(1926-1984)の哲学的方法論の内実と独自性を解明し、その現代的意義を示すことである。本論文は、フーコーの哲学的プロジェクトとは、歴史的調査を通じて、我々の実践を構成する要素の中から偶然的・恣意的な要素を暴き出す「批判」であったという見通しを示す序論と、この見通しに沿って哲学的方法論が練り上げられる過程を跡づける本論五章から成る。各章の議論は以下の通りである。

第１章および第２章は、批判とその方法として考古学と系譜学が練り上げられる過程を明らかにする。第１章では、まず、『狂気の歴史』から『言葉と物』にかけて標榜され、『知の考古学』において定式化された考古学は、伝統的歴史学および全体史の試みでは捉えられない「断絶」を明らかにするための方法として構想されたということが示される。既存の歴史学の乗り越えは、命題や文や発話内行為といった言語を捉えるための既存の単位には還元できない、言表という概念を発見することによって可能になった。言表とは、言語に限らず、存在し効果を発揮する記号すべてを指す概念であり、その集合は言説である。言表は、希少性、外在性、重なりという三つの特徴を持っており、これらはまとめて実証性と呼ばれる。言表は数量上も意味上も希少であり、隠された意味や主体の意図などを内部に反映などしない中立的なものであり、積み重なることで互いに影響を与え合う。この性質ゆえに、言説は言説の空間内部で自律的に変化するとされた(言説の自律性)。そして、言表の自律的な変化は、経験され積み重なった言表が、次に現れる言表を条件づけることによって生じる。この言説の自己規制のはたらきは「歴史的アプリオリ」と呼ばれ、これを探求することが考古学の最終的な目的である。考古学は、起源の探求という原義を換骨奪胎され、ある時代のある社会に存在する言説の編制と歴史的アプリオリという意味でのアルシーヴを探求する学とされる。ただし、アルシーヴの探求としての考古学は、批判の方法としてはいまだ不十分なものにとどまる。というのも、考古学はどのような言説が存在し変化したかという言説の編制やどのような条件付けがなされたかという歴史的アプリオリは記述可能だが、その変化や条件付けが「どのように」起こったのかという問いに答え、偶然性を暴露することはできない。それゆえ、批判の方法の更なる練り上げが必要になる。その練り上げに向けて『言説の秩序』でなされたのは、言説の自律性という考古学の核をなす考え方を放棄することであった。言説は、言説的実践だけでなく、非言説的実践からも影響を受ける。その中でフーコーが最も重要だと見なすのが「真理

への意志」概念である。フーコーは真と偽の区別は、社会の中で歴史的に構成されると考え、この区別に影響を及ぼすものを「真理への意志」と呼んだ。言説の自律性を旨とする「考古学」では言説外部からの働きかけである真理への意志を分析できないので、新たな方法として系譜学が要請される。続くニーチェ論文において、系譜学は由来と現出の探求という形で定式化される。これによってはじめて、系譜学は現在のあり方の偶然性を暴露する批判の機能をになう方法となった。しかし批判の方法としての系譜学が導入されたものの、それまでの考古学が捨て去られたわけではない。

第３章および第４章では、系譜学がどのように実践されたかを跡づけつつ、考古学と系譜学の関係が検討される。第３章では主体の位置づけに注目することによって、考古学と系譜学の違いを浮き彫りにするとともに、両者の共存の仕方が明らかにされた。『知の考古学』において、主体は分析の埒外にあるものであった。その背景には、言表は主体の意図の反映ではないという外在的性質が前提にあっただけでなく、主体の有り様とは言説が作り出すものだという主体観が取られていたからである。これに対して、『監視と処罰』における系譜学では、一転して主体が大きなテーマとなる。この変化の契機となったのは、系譜学という方法が言説だけでなく、身体という要素を導入したことである。身体を分析対象としたことにより、規律・訓練を通して身体に働きかけ主体を作り出す規律権力の働きを描き出すことが可能になった。それと同時に、権力に作り出されるという意味で受動的でありつつも、いったん作り出されるや自ら進んで身体を従順な仕方で統御する能動的な主体のあり方を描くことが可能になったのである。このように由来と現出の探求としての系譜学は、身体と主体の有り様と権力の働きを描き出すが、とはいえその歴史調査の素材となるのはやはり言表である。言説の自律性概念を放棄しつつも、考古学は言表分析の方法として考古学に生き続ける。言表が個々の場面でどのような意味を持つのかを明らかにする考古学の作業は、系譜学における由来の探求に対応する。一方、いかにしてある出来事が生じえたのかという現出の探求は、批判の方法である系譜学固有の領域である。

続いて第４章では、『知への意志』に即して、系譜学と権力論の関係が検討される。フーコーは、権力を抑圧的なものと考える法言説的権力概念では近代以後の権力のあり方を捉えきれないと考え、新しい権力概念を提示する。すなわち、あらゆる関係に偏在する力関係、言い換えると戦略的状況を権力と呼ぶことを提唱する。この権力（微視的権力）の働きは、言説を、戦略と戦術という二つの水準で分析することによって明らかになる。実際にどのような言説が存在し、それがどのような役割を果たしているのかを明らかにする戦術の分析は系譜学でいうところの由来の探求に、そしてどのような目的が言説を戦術として生じさせているかを明らかにする戦略の分析は現出の探求に対応している。これを第3章での議論と重ね合わせれば、由来＝戦術の探求は、考古学によって担われ、現出＝戦略の分析は系譜学固有の領域であり、それを行うために権力という説明概念が導入されたことが明らかになる。新しい権力概念を用いて

セクシュアリテの系譜学を行うと、性は抑圧されるどころかそれについて多くの言説が生産されてきたことがわかる。そして、性についての語りは、本来は存在しない「性そのもの」を欲望させ、さらなる語り、そして知を生産し主体を作り出す。第４章１節で見た権力分析の方法に従えば、性について語ることは戦術、その結果として「性そのもの」に関する知を生産することが戦略であり、後者こそフーコーが「知への意志」と呼ぶものであった。さらに、現在の性のあり方を批判してみせたフーコーの系譜学が、批判の方法としてどれほど妥当なものかがハーバーマスの批判に再反論する形で検討された。

前四章の議論をふまえたうえで、第5章では、フーコーの一つの到達点としてパレーシア講義について検討される。パレーシア講義は「哲学はいかに現実と関わるか」という現代性の態度の問題と「いかにして今とは別の仕方でありえるか」という批判の問題を問うもので、批判のプロジェクトの一つの集大成と捉えることができる。真理に関しては、真と偽の区別が社会の中で歴史的に構成されるという考え方（真理の体制）がこれまで取られてきたが、パレーシア論では外的条件とは関わりなく「自分が真理と信じること」が真理と考えられている。パレーシアとは危険を冒す勇気を発揮して真理を語ることであり、真理の体制に背き、危険を侵すことこそが語り手の言葉の真理性を裏打ちすることになる。パレーシアの系譜学として政治的パレーシアと倫理的＝エートス的パレーシアが語られるが、その目論見は新しい主体観の提示にある。各章で見てきた主体は、権力を背景とする言説的実践および非言説的実践を通して作り出されるものであった。それに対してパレーシア概念が要求するのは、自らの真理の言説を通して変容していく主体であり、権力の働きの相関物として現れる受動的な主体観からかけ離れた能動的な主体観である。勇気を発揮してパレーシアを実践する主体、つまりは批判を実践する主体へと自らを変容する可能性の提示こそ、批判のプロジェクトの一つの到達点であった。

以上が各章で得られた知見の要約である。本論文の主たる主張は次の二つである。第一の主張は中期フーコーの思想を考古学から系譜学への単純な転換として捉える従来の解釈に反して、考古学と系譜学は補完関係を保ちながら練り上げられ、実践されたということである。すなわち、言説分析の方法としての考古学は、一貫してフーコーの方法であり続ける。そして、考古学が記述する言説がどのように生じたのかという現出を分析し、その偶然性を暴露するという明確な目的、つまりは批判の目的を果たす方法として系譜学がニーチェ論文以後加わるのである。第二の主張は、主体をいかに方法論に取り込むかという問題が方法論を練り上げる際の鍵の一つであり、方法論にはフーコーの主体観が密かに示されていたというものである。すなわち、考古学と系譜学が練り上げられる際には常に、言説および権力に作られる主体という主体観が背景にあった。そして、最終的にパレーシア講義において、真理を語ることで勇気を発揮する能動的な主体観が一つの到達点として提示されたのである。

多様なテーマを扱うフーコー思想の議論を支えるのは、言説分析の方法である考古学および言説的出来事の由来を明らかにする系譜学である。この方法の一貫性およびその方法に暗に示される主体というテーマの一貫性をフーコー思想に見出したのが本論文の成果である。

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、現代フランスの哲学者、ミシェル・フーコーの哲学的方法の内実とその独自性を解明し、その意義を示すことを目的としている。フーコーは、いわゆる「ポスト構造主義」を代表する思想家として知られ、その理論は、現実社会を分析するための「道具」として「利用」されてきた。しかし、「狂気」「臨床医学」「刑罰」「セクシュアリティ」といった多岐にわたるテーマを扱い、その「歴史」を描くことが、いかなる意味において「哲学」たりえるのかについての統一的な考察は、これまで十分に掘り下げられてきたとは言いがたいのも事実である。このため、これまでフーコーは、様々なテーマに応じてつまみぐい的に利用されてきたとさえ言える。そこで本論は、フーコーの哲学を、その方法論という観点から徹底的に読み直すことを課題とし、論者の言葉を使うならば、あえて「地味なフーコー像」を提示することを目指す。

まず、序章において、フーコー最晩年の論文「啓蒙とはなにか」をもとに、フーコーの生涯にわたる哲学的試みが「批判」というカントに由来する性質をもつものであることが示され、本論における論述の方向が、フーコーの批判のプロジェクトにおける方法の練り上げとその実践の解明にあることが確認される。この序論は、最終章での、同じく最晩年の「パレーシア講義」の考察と対をなすことによって、本論の目指すところを明確に示しているといってよい。

第一章では、『知の考古学』における「考古学」という方法に関して、「言表」（énoncé）と「言説」（discours）というフーコー独自の概念が、方法論という観点から徹底的に分析される。しばしばこれらの概念は、フーコー自身の方法論的意図を離れて濫用されることがあるだけに、ここでの冷静沈着な分析は後の議論の準備としても重要なものである。第二章では、コレージュ・ド・フランス教授就任講演である「言説の秩序」と、同時期の論文「ニーチェ・系譜学・歴史」を取り上げ、方法論としての系譜学の導入の経緯が精密にたどられる。そこで明らかにされたのは、言説の自律性ということにこだわるあまり「主体」概念を取り扱えなかった考古学という方法だけでは、批判の遂行においてある種の限界があるということであった。しかしここで重要なのは、従来、フーコーの方法論がこの時期において「考古学から系譜学へ」と変化した、すなわち考古学という方法が「破綻」ないしは「失敗」したために系譜学への移行がなされたという解釈が一般的であったということである。論者は、この解釈をテクストの綿密な踏査をふまえて否定し、この二つの方法論が、フーコーの生涯を通じて相互に補完関係にあることを明らかにしようとする。系譜学においても言説分析が必須であるかぎりにおいて、考古学的方法が無用のものとなるわけではない。これは、先にあげた「啓蒙」論文における「批判は、目的において系譜学的であり、方法において考古学的である」という、ある意味では難解なフーコー自身の記述に独自の解釈をもたらすものであり、本論の画期的な独創性をそこに見出すことができる。

この考古学と系譜学の相互補完という解釈は、第三章における『知の考古学』と『監

視と処罰』という、従来それぞれ考古学と系譜学を代表するとされてきた著作の「主体」観を分析することを通じて、より確実なものとなる。すなわち、ニーチェ論文において系譜学の特質であるとされた「由来（provenance Herkunft）と現出(émergence Entstehung)」の探求という二つのうち、言説分析としての考古学が「由来」の探求に、そして批判そのものの方法としての「現出」の探求が系譜学固有の方法として対応するというのが本論の独自の解釈である。さらに第四章においては、『セクシャリテの歴史』の第一巻である『知への意志』を取り上げ、そこにおける「権力」概念の分析が系譜学という観点から考察される。従来この著作は系譜学という観点から読まれることはあまりないが、論者はそこで展開される「戦術」と「戦略」という概念の関係に着目し、これを先にふれた「由来」と「現出」の二分法に対応するものであるとする。すなわち、実際にどのような言説が存在し、それがどのような役割を果たしているのかを明らかにする戦術の分析が由来の探求に、そしてどのような目的が言説を戦術として生じさせているかを明らかにする戦略の分析が現出の探求に対応しているというわけである。ここにおいて、『知への意志』における権力論が、セクシュアリテの歴史を批判的に記述するための方法論であることが明らかとなる。以上のような解釈は、従来のフーコー研究にはみられなかったものであり、正確なテクスト読解に基づいた解釈の独創性は高く評価できる。（第四章の元になった論文は、2007年度関西倫理学会優秀論文賞を受賞している。）

最終章である第五章は、いわばアペンディックスのようなものではあるが、ここにおける、さまざまに分類されるパレーシア（隠さず率直に話すこと）のうち、流布している「真の生」とは異なった生の在り方の可能性を求めるキュニコス的パレーシアこそがフーコー自身の「いかにして今とは別の仕方でありえるか」という批判的哲学の営為に対応するという解釈は、序論におけるフーコーと「批判」についての記述とあいまって、本論文を結ぶにふさわしいものとなっているといえよう。

以上、本論文はフーコーの哲学を、最近公刊された講義録を含めて方法論という観点から読み解き、独自の生産的な解釈を示したという点においてすぐれたものであり、今後のフーコー研究に与える影響も大きいものとなることは間違いない。しかし、本論文にも不足する点がないわけではない。たとえば、扱われた著作に関して、初期の『言葉と物』や後期の『セクシュアリテの歴史』第二巻、第三巻の考察が欠けていることは、フーコー哲学の全体像の解明という点からすれば物足りないことも確かである。また、哲学の学位論文として冷静かつ実直なテクスト解釈に専念したためか、フーコーの思想がもつラディカリズムを描ききれていないきらいもある。しかし、これは論者の今後の精進によって補われるはずのものであり、直ちに本論の意義を損なうものではない。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成二十三年十一月二四日、調査委員三名が論文内容とそれに関連し

た事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。